

「大動脈瘤」と「大動脈解離」は緊急を要する血管手術の代表的な疾患であるが、病型、病因により症状が多彩であり、しかも病変部破綻はしばしば致死的事であることから、正確な早期診断と早期の適切な治療法選択がきわめて大切な疾患である。しかしながら、これら疾患の正診率と予後は現在もまだ十分ではなく、さらに慢性期の治療法の選択には多くの議論を残している。

近年は、この分野の血管生物学や画像診断が急速に進歩し、大動脈瘤・大動脈解離の諸病型における病理・病態の詳細が明らかになり、内科的・外科的治療法選択の指針や急性・慢性期の看護方針が提唱され、これら疾患の医療が大きく変貌しつつある。

このように「古くて新しい」疾患を対象に「大動脈瘤・大動脈解離の臨床と病理」と題して上梓された本書には、以下に述べる多くの特徴がある。

(1) 本書は、大きく①基礎編、②臨床編、③症例編の3部から構成されており、いずれもわかりやすく、また多くの図表や諸処に関連するトピックスに関する解説が「コラム」を挿入して具体的かつ簡潔に解説されていて、初心者でも系統的に理解できるように配慮されている。

(2) 「臨床編」では、診断法・治療法、治療指針の選択、看護手順について、多くの画像(単純X線、CT・MRI、超音波画像など)や図解を示して、診断のみならずコンピューター技術を駆使したステントグラフト設計や仮想留置像、また外科的手術の実際など、最新の専門的知識を紹介している。

(3) さらに「臨床編」で特筆される点は、第4章で取り上げられている「クリニカルパスに基づいた看護」である。この章では、大動脈瘤、大動脈解離の手術前、後の看護手順の実際を医療者・患者向けのイメージ図を示しつつ、患者の側からの看護の基礎や治療目標などについてのチェックポイントを具

体的に提示され、わかりやすい解説となっている。

(4) 「症例編」では、大動脈瘤と大動脈解離の典型例、また診断や治療法を決定する際の参考例などの貴重な24症例が提示されている。各症例の病歴、診断とその根拠になった所見やポイント、治療法とその選択理由、手術材料や剖検所見についての肉眼ならびに組織の病理とその解説、最後に症例の要約、総括がなされている。このように、各症例に編者の言う「学びきれない程の教訓や啓示」を示唆する所見とまとめが提示されている。この「症例編」は編者たちの臨床医学に対する真摯な学問的姿勢を窺わせる章となっており、本書の症例の貴重さと相まって、本書の大きな特徴となっている。

(5) 本書は、内科医、外科医、放射線科医、病理医がそれぞれの専門分野を分担執筆することにより、大動脈瘤・大動脈解離についての基礎・臨床を広く、かつ偏りなく読者に理解させる良書となっている。しかし分担執筆による医学書が陥りがちな重複、欠落部分がなく、しかも診断や治療法選択の整合性がよくとれていること、加えて「問題提起」が素直に提示されている点は、分担執筆者が同一施設で診療体制を組んだか組んでいる医師、看護師であることから、日頃より症例についての活発な討論がなされている診療体制を反映しているためと思われる。編者が序文で述べている「診療体制の構築」の大切さを理解させる意味でも本書は専門外の医師、看護師にとって含蓄に富んだ専門書となっている。

このように本書は、現在の日本における大動脈瘤・大動脈解離に関する臨床と病理の集大成として、またこの分野の日常診療に直ちに役立つ専門書として循環器疾患に携わる医療従事者の必携の専門書となっている。

(B5判 244頁 定価10,500円(本体10,000円+税5%))  
2004年 医学書院 刊